

きらボ通信

第3号（2009年8月）

明星大学ボランティアセンター（愛称：きらきらボランティアセンター）

特集1：設立1周年記念シンポジウム報告 特集2：学生ボランティア活動へのお誘い

ボランティア活動と大学生活

青梅校 副センター長 菱山 覚一郎

（一般教育〔青梅校〕社会科学 准教授）

ボランティアセンターが開設され、1年数ヶ月が過ぎ、出入りする方や登録団体も増えてきました。当センターの活動も軌道に乗ってきました。その一方、運営に関係する者には、ボランティア活動の意義やあり方を考えさせられる日々が続いております。

ボランティア活動に参加し、社会貢献をしながら成長している学生諸君を見てみると、うらやましさを感じます。大学時代は、終わってみれば「あっ！という間」です。その間の経験や学びが、将来の自分を方向づけます。ボランティア活動に参加している学生は、異年齢の方と接しながら社会を知り、その過程で人間関係などを学んでいます。人や社会と出会う活動を通して、新たな自分に出会うこともあるようです。もちろん、困難や迷いを生ずることも少なくありませんが、それらを乗り越え、彼らは成長しています。

しかし、在学生の中には、ボランティア活動に一步を踏み出せない段階の人もいるようです。同様の傾向は、大学の教職員にもあると思われ

ます。興味のある人は、大学での自分の研究や業務に関係する部分からでも、ボランティア活動に参加してみてください。ほんの少しの勇気が、世界を広げます。返ってくるものは、非常に大きいです。まずは、「きらボ」でボランティア募集の情報収集と相談から始めてみたらいかがでしょうか…？



「大型絵本を使った読み聞かせボランティア」

大学発：市民力へ

——地域とむすぶ学生ボランティア活動の可能性——

去る 4 月 25 日（土）午後、本センター設立 1 周年を記念して、シンポジウム「大学発：市民力へ」が日野校舎のアカデミーホールで開催された。当日は悪天候にもかかわらず、明星大学の学生・教職員のみならず、多摩地域の市民、ボランティア活動推進機関や福祉施設の関係者、近隣大学の学生ボランティアなど、約 100 名の参加者を得て盛会となり、学生ボランティア活動や大学ボランティアセンターのあり方に対する多くの示唆と励ましをいただいた。また、シンポジウム終了後の交流会にも大勢の方が参加して下さいました。以下、シンポジウムの概要をお伝えする。

【シンポジウム趣旨——ご挨拶に代えて】

センター長 渡戸 一郎

（人文学部 人間社会学科 教授）

昨年 5 月に開設された明星大学ボランティアセンターは 1 周年を迎えます。これを機にセンターでは、「大学発：市民力へ」をテーマに掲げ、地域とむすぶ学生ボランティア活動の可能性を探るシンポジウムを企画いたしました。

いま世界は大きな転換期にあり、私たち一人ひとりが、どのような生き方と社会のあり方を目指していくかがあらためて問われています。また、私たちにとって身近な地域社会でも、雇用・福祉・子育て・教育・環境・まちづくり・人権・多文化共生などさまざまな問題が山積しています。こうしたなかで、大学が「市民社会の一員」としてなしうる社会貢献のあり方が課題になるとともに、学生たちが「市民としての力」をいかに獲得し発揮していくかが大きく期待されています。

学生によるボランティア活動は戦前の大学セツルメント活動に始まり、戦後も青年や学生たちによる BBS 運動や VYS 活動など、さまざま

活動が生まれてきました。そこには、社会の問題に敏感に呼応し、自分たちでできることから社会や問題を抱える当事者に働きかけていこうという、気づきや課題意識に裏づけられた「ソーシャル・アクション」と、新たな市民意識への志向性があったのではないかと思います。

一つひとつのボランティア活動は小さな力ですが、それが大学のなかから地域に広がっていくことで、あるいは、地域の多様な市民活動や社会資源とむすんでいくことで、「大学発の市民力」を発揮していくことができると願っています。本日は、大学内にとどまらず、地域の市民活動団体や公的団体・機関等と連携して展開される学生のボランタリーアクションの課題、そして大学ボランティアセンターが果たすべき社会的役割を、「市民力」をキーワードとして皆さまと共に考えたいと思います。

【基調講演】

市民力へ：いまボランティア活動に求められるもの

山崎 美貴子 先生

(神奈川県立保健福祉大学学長、東京ボランティア・市民活動センター所長)

阪神淡路大震災では 30 万人余のボランティアが現地に駆けつけたが、そこにはボランティア活動経験のない学生たちも多数参加した。そこには「居ても立ってもいられない」「他人事ではない」という受け止めが認められた。被災地に駆けつけた学生たちの中から、大学に対してボランティアセンター設立やボランティア講座の要望が出て、大学としての取り組みが始まった。

ユース・ビジョンの調査によれば、全国の 1153 大学・短大のうち、ボランティアセンターやボランティア担当職員が配置されている大学等は 85 校(私立 75 校、国立 5 校、公立 5 校)であり、圧倒的に兼職の形でボランティア担当職員だけを置いているところが多い。また、14.5%の大学等は今後ボランティアセンターの開設を検討したいとしている。

アメリカでは、IT 化が進み、学生が自分で問題解決できる力が低下したことから、スタンフォード大学・ハーバード大学・ブランダイス大学・ジョージタウン大学などがコンソーシアムを組み、Active Learning(体験学習)が取り組まれている。また、大学構内に Community Action Center を開設し、支援している。そこでは、例えばホームレス問題に国連のハビタットとも連携した活動も展開されている。こうした活動は、地域を変えると同時に、社会から学ばせていただくことになる。日本では、現代 GP を受けてこうした活動が各地の大学で展開されつつある。イギリスでは、ブレア政権の下で、「ともに未来を創ろう」とい

うスローガンが打ち出され、Citizenship Education を中心とした教育が展開されている。そこでは、一人ひとりの多様性の尊重と共助・自助、そしてコミュニティに根差した Service Learning が取り組まれている。

ボランティアの原則として、①自主性・主体性、②社会性・連帯性、③無償性・非営利性、④創造性・先駆性・開拓性があるが、②社会性・連帯性には一人の市民としてという「市民性」を加える必要がある。市民とはサービスの受け手であると同時に担い手でもあり、そこには支えあいと学びあいがある。それが地域を豊かにしていく。また、③無償性・非営利性には実費弁済も含まれる。さらに、④創造性・先駆性・開拓性には「提言する」役割ということも重要だ。

ボランティアは自分発であり、ちょっと大変だけど面白くないと長続きしない。しかし、ボランティア活動は学びのチャンスで

あり、生き方を変えていくチャンスでもある。学生時代にボランティア活動を通じて、普段出会わないような人と出会い、学ぶものは本当に多い。ボランティア活動を通して地域に学び、地域とともに歩み、市民力を養っていくことが「市民参画型社会」を創っていく。



【学生ボランティア活動の発表】

1. 「めばえの会」 浅野泰平 (人文学部 心理・教育学科 (心理学専修) 3年)
2. 「Idear 研究会」 坪内大二郎 (理工学部 機械システム工学科 4年)
3. 「ひまわり」 中村翔子、鶴岡瑠璃子、野口美穂 (人文学部 心理・教育学科 (教育学専修) 3年)

【シンポジウム】

学生ボランティア活動の課題と可能性

司会：垣内 国光（人文学部人間社会学科教授）

パネリスト：浜野 智之さん（日野市ボランティアセンター）

相馬 則子さん（多摩ボランティアセンター）

山崎 美貴子先生（神奈川県立保健福祉大学学長、

東京ボランティア・市民活動センター所長）

垣内（司会）：明星大学は地域社会とのつながりが弱かったが、ボランティアセンターが出来たことで地域とつながっていくことが改めて課題となっている。今日は、日野市と多摩市のボランティアセンターの方をお招きしてこの点について掘り下げていきたい。

浜野：日野ボランティアセンターは職員 4 人、市民の相談員 14 人で運営しているが、明星大学の学生ボランティアとの関わりも長い。地域の社会福祉協議会として大学ボランティアセンターと連携していきたい。

学生がボランティア活動するには、まず、日常生活での「あれ、なんだろう？」という疑問をもつことだ。そして自分にできることは何かを考えて情報を集めよう。学生は大学の名前が使えるというメリットがある。そして仲間を増やそう。ボランティア活動には「小さな勇気」が必要だが、それを大人たちが認め、敷居を低くすることが必要だ。また、活動の後で、どうしたらもっと楽しくできるか考えることも大

切だ。しかし、「ボランティア」ということにごくこだわらず、好きなことをやってほしい。

相馬：ボランティア活動は異世代交流になる。ボランティアを始めるのに障害者支援活動は入りやすい。しかし障害をもつ学生のサポートは大学の責任だと思う。手話指導やノートテイク講習会はその意味で重要だ。また、学生のボランティア教育も望まれる。社会福祉協議会では日中独居の高齢者のための地域サロンを開設しており、学生にも関わってほしい。

地域にはニーズが沢山ある。ボランティアには、「やさしさの押しつけ」にならないよう、「相手の気持ちを尊重すること」が求められる。そうしたことが住みやすい地域づくりにつながる。

吉澤（理工学部教授、明星大学ボランティアセンター副センター長）：明星大学では福祉の分野だけでなく、環境ボランティア活動もある。日野市の CO2 削減キャンペーンにも学生が参加している。

市川（理工学研究科修士課程 1 年）：3 月末からこのキャンペーンに参加し、1 日 10 軒から 20 軒のお宅を回っているが、話を聞いてくれるのは 5～6 人とどまっている。

木村（至誠学舎立川・至誠ホーム）：至誠ホームでは 30 年前からボランティア・コーディネーターを置いている。高齢者福祉施設ではあるが、そこには福祉だけに限定されない活動分野がある。是非、ボランティアに来てほしい。



坪内（理工学部4年）：八王子の夢あるまちづくりの団体は60歳以上ばかりで、30～40代にいない。学生時代にボランティア活動を体験することで、社会に出てからもそれが生きるはずだと思う。

荻野（本学卒業生、めばえの会出身）：めばえの会には30年の活動の歴史がある。ボランティアとしての想いを貫いていくことが大切だ。

山崎先生：ボランティア活動をしている学生たちは、実にきらきらしており、かけがえのない学生たちだ。大学の教育力が問われているが、ここでは人間性の発達という点が重要だ。また、

【閉会の挨拶】

明星大学では、伝統的に教育や福祉関連のボランティアサークルが活発に活動している歴史があります。昨年5月のボランティアセンターの発足以降も、新しいグループが立ち上がり活動を始めました。環境関連の活動は歴史が浅いのですが、様々なプログラムに参加しています。今回のシンポジウムでは、環境関連のパネラーの方をお招きできるように、環境ボランティア活動を深められるような仕掛けを作りたいと思います。

長い間、大学の役割は、「教育」と「研究」に

大学が変わることと地域が変わることとは相乗的・循環的な関係にあり、大学には地域と呼吸する関係が求められる。

渡戸センター長：今回のシンポジウムでは「大学発：市民力へ」をテーマに掲げたが、山崎先生、パネリスト、そしてフロアのご発言をお聞きして、「大学発」とは不遜な想いであり、「市民力は大学だけで生み出されるものではない」ことを学ばせていただいた。本ボランティアセンターにとって、今後ますます地域との相互作用、相乗効果が重要であることを再認識した。

明星大学ボランティアセンター 副センター長
吉澤 秀二（理工学部 環境システム工学科 教授）

あると考えられてきましたが、最近、「地域・社会貢献」が加わり、これら三本の柱が大学の存在意義となっています。社会・地域貢献の機能はボランティア活動と産学官連携から成り立っています。明星大学では、昨年5月にボランティアセンターを、本年4月に連携研究センターを相次いで設立し、地域・社会貢献のための活動の入れ物の形ははっきりしてきました。これからは、学生・教員・職員との協働により中身を充実させていきましょう。



大学会館2階ボランティアセンターにて交流会

特集2：学生ボランティア活動へのお誘い

明星大学ボランティアセンターでは、新入生を迎えた4月、本センターを会場に、教職員による「昼休みミニ講演会」を2週間にわたって開催しました。参加者は延べ109人でした。また、前期試験を前にした6月29日から6回にわたり、昼休みに学内ボランティア団体による「学生ボランティア活動紹介」（12団体）を開催し、延べ121人の参加を得ました。7月7日にはこのプログラムを振り返る「総括ミーティング」も行いました。

明星大学ボランティアセンター 昼休みミニ講演会プログラム

学生ボランティア活動へのお誘い
— 広がる世界、つながる仲間 —

日程：4月6日(月)～4月17日(金) 12:20～12:50(30分)
会場：きらきらボランティアセンター
〔日野校22号館(大学会館)2階〕

月日	昼休み(12:20-12:50)	参加者数
4月 6日(月)	「明星大学のボランティア活動」 宮崎茂男(ボランティアセンター課長)	11
4月 7日(火)	「児童養護施設の学習支援」 垣内国光教授(人間社会学科)	12
4月 8日(水)	「環境保全とボランティア」 吉澤秀二教授(ボランティアセンター副センター長・環境システム学科)	12
4月 9日(木)	「阪神淡路大震災と学生ボランティア」 渡戸一郎教授(ボランティアセンター長・人間社会学科)	10
4月 10日(金)	「教職課程とボランティア活動」 荻山覚一郎准教授(ボランティアセンター副センター長・一般教育社会分野)	10
4月11日(土) 休		
4月12日(日) 休		
4月 13日(月)	「人間関係 ～友人・ボランティア・カウンセラー～」 黒岩誠教授(心理・教育学科 心理学専修)	12
4月 14日(火)	「ノートテイクの紹介」 畑野理美(ボランティアセンター)	10
4月 15日(水)	「環境保全とボランティア」 吉澤秀二教授(ボランティアセンター副センター長・環境システム学科)	12
4月 16日(木)	「阪神淡路大震災と学生ボランティア」 渡戸一郎教授(ボランティアセンター長・人間社会学科)	10
4月 17日(金)	「ホームレス支援とボランティア活動」 石田健太郎(社会福祉士実習指導員)	10
	合 計	109



学生ボランティア活動紹介

—広がる世界、つながる仲間—

「知ってる？明星の学生ボランティア活動ってけっこうすごいよ！」

さらボ学生ボランティア団体が、自分たちのボランティア活動を紹介します。
ぜひお越しください。

日程：H21年6月29日(月)～7月6日(月) 12:20～12:40
会場：さらボボランティアセンター(日野校22号館(大学会館)2階)

日程		団体名	報告者	活動概要 主な案件別の活動計画、日常活動の紹介他	参加者数
6月29日(月)	①	海外支援サークル あすなる	教育4年 吉田 太一	①海外の恵まれない子供達に奨学金を送っています。 ②海外に幼稚園を建設しています。③英語教育 ④他大学との交流 ⑤国際シンポジウム参加など。	15
	②	NPO法人 朝日キャンプ	情報2年 郷戸 祐一郎	知的障がいや自閉症の方を対象に、夏に行う山 や海でのキャンプなど。その他年間通して様々な プログラムを実施しています。	
6月30日(火)	①	へき地教育研究会	教育3年 石本 あさひ	約1週間、地方の小学校・幼稚園に入り、 先生方・子ども達・地域の方との交流を行う。	30
	②	ひまわり	教育3年 中村 翔子	七生福祉園低年1寮の子ども達と、 学生の考えた遊びを一緒に行う。	
7月1日(水)	①	ボランティアサークル 「SMLY」	教育3年 樫沼 猛	主に夏休みは学生同士の交流として夏合宿を行 います。普段は2回ほど発達障害を持つお子さん と保護者の方と交流しています	11
	②	初等教育研究会 どろんこの会	教育3年 峰尾 佳奈	地域や児童館の子ども達と遊びやキャンプを通し てお互い成長する。普段も土、日等に地域や児童 館の子供たちと遊んでいます。	
7月2日(木)	①	児童文化研究会 人形劇団「まめ」	教育3年 小川 将平	人形劇地域公演(唐木田、檜原、桜ヶ丘等)	15
	②	ボランティアサークル めばえの会	心理3年 浅野 泰平	ハンディキャップを持った人たちの支援活動や近 隣の福祉施設の活動に協力。夏合宿や、キャンプ など	
7月3日(金)	①	Idear研究会	機械システム4年 坪内 大二郎	アイデア勝負の企画屋集団です。ホテル見学ツ アーなど面白企画を生み出しています。また、明 星大学初の環境サークルです。	12
	②	明星大学ごみ拾いサークル 「サンクス！」	心理3年 遠藤 翔真	ゴミを拾う。夏にはBBQ・キャンプ。冬には合宿と 新しい挑戦を繰り返している。	
7月6日(月)	①	教育研究部	教育3年 矢田部 緑	子ども会活動、夏合宿、学習会など	13
	②	学生教育ボランティア	人間社会3年 笠原 雄	活動報告：小作台小学校(羽村市)	
7月7日(火)		総括ミーティング		日野市ボランティアセンター 浜野智之氏、 実践女子大学ボランティア同好会 (8名)	25
(①12:20～12:30 ②12:30～12:40)			合 計		121

活動を楽しむことの大切さと社会参加について

島田 博祐

(人文学部 心理教育学科教育学専修 准教授)

ボランティア活動を行う理由として、“困っている誰かを助けたい”、あるいは“公共の役に立ちたい”という愛他心や社会貢献への想いがあります。しかし、きっかけとしては良いものの、その想いだけで活動を継続するのは、大半の方にとって難しいともいえます。何故なら強固な意志を持つ一部の方を除き、義務感、やらされ感が生じやすいからです。

社会貢献への強い想いから、学生時代に熱心に活動に係わっていた方が燃え尽きてしまい、以後、社会人になってからはボランティアに全く関心を失ってしまうケースも見てきました。その方の人生と社会の双方にとって多大な損失であり、非常に不幸なことです。

それではそうならないために、どのようにボランティア活動にかかわればよいのでしょうか。一言でいえば「気軽に楽しむこと」であると思います。国民性からか、欧米人に比べ日本人はとかく、“～せねば”、“～すべき”と教条主義的になりがちであり、楽しむ観点が不足しているように感じます。活動に対し堅く構えず、まずは試みにチャレンジすることで何かを学び、それが新たな知識の獲得や自己成長につながるとなれば、次第に活動自体が楽しくなり、義務感が消え、生涯にわたる自発的、主体的なボランティア意識として根付くと思うからです。ただ注意すべきは、「気軽に楽しむ≠いい加減にやる」という点です。引き受けた活動に真摯に取り組む姿勢は、当然ながら不可欠です。責任を果たしつつ、フットワークは軽く、活動を楽しむ心の余裕を持つことが大切です。

またボランティア活動は、学生にとって「社会参加の契機（きっかけ）」になると考えます。社会環境の変化により、近年の学生は子どもの頃、異年齢集団で徒党を組み遊ぶ（ギャングエイジ）経験が少なく、人間関係も限定化される傾向が強くなっており、結果として個人差はあるものの、適切な対人関係の構築が困難になっているようにも思われます。ボランティアは様々な年齢、立場の違う方々と触れ合う機会をもたらします。そうした関係性の中で刺激を受けることで視野が広がり、対人関係やコミュニケーションのスキルが磨かれると共に、自己の潜在的な可能性を発見することにもつながるのではないのでしょうか。

ボランティアセンターには、学内外の様々なボランティア情報が集められ、それらを精査した上で学生に提供しています。ぜひ「楽しむ心」を持って、積極的に「社会参加の契機」となるボランティア活動に係わっていただければと思います。



低炭素社会実現とボランティア活動

伊庭 健二

(理工学部 電気電子システム工学科 教授)

最近、全世界で「低炭素社会実現に向けた CO₂削減」への関心が高まっている。オバマ大統領は今後 10 年間に 1500 億ドルの投資を公約し、麻生総理は 2020 年の CO₂削減を 05 年から 15%削減すると表明した。私は電力システムの運用制御を専門分野として永く研究活動をしてきたが、これまではスケールメリットを追求して重厚長大な大規模システムを対象としていた。しかし近年は一般家庭を含む電力の消費者（需要家）サイドでの研究課題に注目が集まっている。関連する国際学会で現在注目されている「デマンドレスポンス」は「需要家の自主的協力による需要調整」と解釈され、最新の研究課題(Current Topics)である。

日野市の展開する「ふだん着で CO₂をへらそう」という活動はちょうどこの社会的要請にマッチしたもので、本学のボランティアセンターに協力依頼があったと聞いて、研究室の学生とともに協力させて頂くことにした。エネルギーの単位は Wh(ワットアワー)ですが、国単位で省エネを論じる場合、補助単位として G(G:ギガ=10⁹)を使うが、一般家庭での小さな k(k:キロ=10³)単位の積み重ねで達成していく。日野市の職員の方も「日野市だけで CO₂を減らしても意味が無いのですが・・・」と話されたが、このような草の根の地道な努力なしに低炭素社会の実現は難しい。地方自治体として率先して CO₂削減に取り組みはじめた日野市の先見性は高く評価されるべきである。

この日野市の職員の皆さんが信頼し期待をしているのが明星大学の学生ボランティアだという。地元から信頼を得た、気さくでフットワーク

の良い本校の学生が一般の家庭を訪問し、自らの言葉で活動を説明し協力を求めると、突然の訪問にとまどいながらも、好意的に話を聞いていただけるらしい。学生ボランティアの活動が、官公庁や電力会社の広報活動にも劣らない訴求力・説得力があるのだから、これは大きな社会貢献だといえる。しかも、日野市への地域貢献から始まり、国内、ひいては世界的課題へ貢献することになる。

社会的弱者を支援するボランティアは、専門知識の豊富な文化系の学生にはなじみ深いのが、理工系の学生にはまだ敷居が高いと聞く。この「ふだん着で CO₂をへらそう」は理工系の学生が自らの専門性を生かせるボランティア活動であり、科学技術の説明能力を高め、社会貢献できる良い機会でもある。研究室のメンバーによるボランティア参加はまだ 4-5 名であるが、今後この活動が理工系の学生にも広く浸透し、教室で学んだ問題を彼らが身近なボランティア活動を通じて解決していくことを期待している。



学生の活動現場から

学生ボランティア団体活動紹介

海外支援サークル「あすなろの会」

吉田 太一
(教育学専修 4年)

明星大学あすなろの会は社会人あすなろの会の活動を引き継ぐ形で活動を始めました。4月中旬にサークルとして活動を始め、まだ2カ月余りですが明星大学あすなろの会の活動紹介をしたいと思います。

明星大学あすなろの会の活動は大きく分けて3つあります。第1は、あすなろの会の趣旨に賛同していただいた奨学金里親（奨学金は社会人の方々により寄付をいただいています。現在は9人のスカラーがいます。またフィリピンの1年間の授業料は6万円前後です。）とフィリピン国の学校、スカラー、行政の関係者等との窓口を務めることです。文書、手紙、成績表等のやり取りを行い国際親善に貢献することが私たち明星大学あすなろの会の活動です。奨学金を受け取る公立小学校6年生はディゴス市やハゴノイ町の教育課が選考してくれます。また、寄付を受けるだけでなく、星友祭（明星大学の学園祭）で模擬店を出し、売上で海外の子供たちに文房具を送ることも計画しています。

第2は、小学校入学前の幼児の為に、幼稚園を建設しています。幼稚園の建設用地は行政の公有地を借りています。幼稚園建設資金積み立てが完了すれば、村の幼児数等を調査し、建築計画を検討した上で建築資金を送ります。行政側の職員、先生により多くの幼稚園児たちが卒業し小学校に入学しました。これも明星大学あすなろの会の活動です。5月下旬にあすなろの会へ寄付をいただいている方々を集め平成21年度総会を開催

し、4棟目の幼稚園建設も決定しました。（8月完成予定）

第3は、海外の小学校、ハイスクール等の教育システム（学科、カリキュラム等）を研究しグローバルな視点に立脚して日本に於ける教育の問題点を考えます。その一環として海外で教育関係のボランティア活動をしている大学団体との交流もあります。また、フィリピンは英語圏なので、英語でのコミュニケーションができるように、毎回、サークルの中で簡単な英語の学習もしています。

明星大学あすなろの会は、寄付された奨学金等資金を効率よく運営し、一人でも多くの子供達の学習の機会を増やすことが、私たちに課された使命と認識し活動しています。

一緒に活動をしてくれる人・質問等があれば下記アドレスまで連絡ください。宜しくお願ひします！

連絡先：the.hues.of-rainbow@ezweb.ne.jp



Ⅰ 研 ホタル見学ツアー実施報告

坪内 大二郎（機械システム工学科3年）

○ホタル見学ツアーを行いました。

Idear 研究会では、日野校の敷地内に関東固有のゲンジホタルが生息していることを去年から知り、このことを「より多くの人に知ってもらい、みんなで見守って行きたい」という思いで見学ツアーを企画しました。6月23日から7月10日まで、火曜日と金曜日を中心に5回、イベントを行い、延べ47の方が参加してくれました。

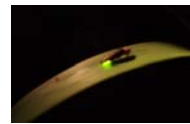
去年は、ピーク時に100頭ほど飛んでいたの



のゲンジホタルが生息していることを去年から知り、このことを「より多くの人に知ってもらい、みんなで見守って行きたい」という思いで見学ツアーを企画しました。

ですが、今年は、ピーク時でも40頭ほどでした。今年は、私たちが予想していたよりも、あまりホタルが出ませんでした。参加者からは「こんなに明るいとは思ってなかった」「感動した」などの感想をもらいました。

「百聞は一見にしかず」来年は是非、観に来てください。また、明星大学のホタルについて詳しく知りたい方は、ボランティアセンターまでお越しください。



ボランティア活動レポート

日野市のCO₂削減の取り組みのボランティアに参加して

市川 昌人

(理工学研究科 環境システム学専攻)



いま、環境問題は世界中で問題として取り上げられています。その中でも最も大きな注目を受けているのが、地球温暖化問題とその原因となるCO₂などの温室効果ガスです。

日野市では、この問題を受けて、「普段着でCO₂をへらそう」というCO₂削減の取り組みの普及活動を行っています。

今回私はボランティア活動として、日野市役所の環境保全課の方々と共にこの取り組みのお手伝いをさせていただきました。活動の内容は、CO₂削減のために家庭でできる簡単な省エネの取り組みについてパンフレットと共に説明を行い、「すでに行っている、またはこれからしようと思う省エネの取り組み」についてアンケートを行っ

ていただく、というものです。家を一軒ずつ訪問したり、多摩動物公園内でお客さん方に協力をお願いしたりしました。

このボランティアでは、不特定多数の方々には説明を行ったりしたこと、また同年代の学生だけでなく年配の方など幅広い年齢層の方々がボランティアと一緒に参加されていたことなど、様々な人達との交流の中で活動を行うことができ貴重な経験となりました。



~~~~~

## 「ひの新選組まつり」に参加して

鈴木 友香里  
(教育学専修2年)

私は今回ボランティアとして「ひの新選組まつり」に参加しました。このお祭りは毎年日野市で行われているもので、土方歳三没後140年の今年、第12回目を迎えました。主なイベントは、新選組とその周辺の人々の格好で行うパレードや、その姿を競うコンテストなどです。高幡不動尊の参道や日野駅周辺を、まるで物語から抜け出してきたような人々が遂列をつくって歩いていく様子は圧巻です。見物のお客さんもたくさんいて、とてもにぎやかなお祭りです。

今回の私の役所は「瓦版売り」であり、新選組まつりのちらしを、見に来てくれた人達に「瓦版」のように配りました。パレードにも「新選組と出会った人々」というグループの一員として参加させてもらえました。当日天気にも恵まれたことと着物を着用していたことで非常に暑く、1日中歩き回ったので疲れしました。でも、時代劇さながらの衣装を着せてもらい、お祭りをつくる一員として加わらせてもらったことが貴重な体験になりました。

私がボランティアに求めるのは、こういう様々な体験や達成感です。誰かの手助けになることを進んでやるのがボランティアの本質ですが、それを通して自分の経験を深めたり自分を成長させたりできる喜びが、私がボランティアを続ける原動力になっています。



第12回ひの新選組まつり (H21.5.10)

~~~~~

「夏の防犯・日野市民のつどい」に協力

7月11日(土)日野市立第三小学校、7月28日(火)日野市民会館で行われた日野警察署の防犯のつどいにおいて、本学ボランティアサークル「めばえの会」のメンバーを中心に学生9名がピーポー君の着ぐるみを着て、参加・協力しました。

[写真：日野市民会館 H21年7月28日撮影
写真左から人間社会学科4年 森真人君、
同森山聡君]



☆センター活動報告☆

ここでは 2009 年 4 月以降の本センターの主な活動、ボランティアセンター団体登録の状況について報告します。

2009 年 4 月からの主な活動

月	日	行事等	
4	6	学生教育ボランティア（ネットワーク多摩）第 1 次募集開始	
	10	新入生見学（電気 20 名）	
	11	ノートテイク講習会（青梅校）参加者 11 名	
	16	新入生見学（教育 15 名、建築 8 名）	
	17	「日本児童野外活動研究所」来室	
	20	「日野・発達障害を考える会 スキッパー」来室	
	23	新入生見学（教育 15 名）、学生教育ボランティア（ネットワーク多摩）第 1 次募集締め切り	
	25	ボランティアセンター設立 1 周年記念シンポジウム開催。参加者 108 名	
	27	「特定非営利活動法人 療育ネットワーク川崎」来室	
	28	「ポスカ」来室、新入生見学（環境 51 名）	
	5	1	日野市社会福祉協議会「障害者施設交流会部会」出席
		2	ボランティア紹介（人文学部「自立と体験」）
		7	「ココア」来室
		8	「社会福祉法人 ココロ学舎」来室
11		「毎日新聞社」来室	
15		「障害学生フォーラム」出席	
19		日野市障害者生活・就労支援センター「くらしごと」センター長来室 毎日新聞社 I 研緑のカーテン取材（毎日新聞 5/22 「キャンパスウォークこれが評判」掲載）	
22		第 1 回運営委員会開催	
26		第 1 回学生ボランティアグループ会議。めばえの会ミーティング（17 名）	
28		「こすもす」来室、「NPO おたすけ個別補習塾」来室	
29	「地球の子どもを応援する会」来室、「スープの会」来室、I 研ミーティング		
6	2	「小金井市東児童館」来室、「ネットワーク多摩」来室	
	4	「町田市立小山ヶ丘小学校ボランティアコーディネーター」来室、「NPO 法人全国移動サービスネット」来室	
	5	I 研ミーティング、エコキャップ回収	
	9	「町田市立小山ヶ丘小学校ボランティアコーディネーター」来室、第 2 回学生ボランティアグループ会議	
	10	めばえの会打ち合わせ	
	11	「お助け個別補習塾」来室、立川「テイクオフ」来室、「子ども支援アンアンネット」来室、 「帝京大学児童文化研究会 Step」訪問	

7	15	「日野市環境保全課」来室、「野楽」来室、学生教育ボランティア（ネットワーク多摩）第2次募集開始
	16	めばえの会ミーティング、I研ミーティング
	17	「5大学学生部長連絡会」学内開催施設見学、I研準備作業
	23	第3回学生ボランティアグループ会議、「NPO法人グループゆう」来室
	24	日野市ボランティアセンター来室
	26	学内見学ツアー（東京西地区学生生活連絡会）40名
	27	ノートテイク講習会（日野校）参加者5名
	29	学生ボランティア活動紹介（15名）、「テイクオフ」来室 毎日新聞社 I研ホテル見学ツアー取材
	30	「日野市障害福祉課」、「日野市障害児放課後クラブ」来室 学生ボランティア活動紹介（30名）
	1	学生ボランティア活動紹介（11名）、「野楽（tama Rock）」来室
	2	学生教育ボランティア（ネットワーク多摩）第2次募集締切、学生ボランティア活動紹介（15名）、「帝京大学児童文化研究会 Step」、「じゃんぐるじむ」、「人形劇団にじいろ」来室
	3	学生ボランティア活動紹介（12名）、第2回運営委員会開催
	7	第4回学生ボランティアグループ会議：学生ボランティア活動紹介（25名）総括ミーティング、「日野市ボランティアセンター」、「実践女子大学ボランティア同好会」来室
	14	「日野市青少年委員の会」来室
	15	「財団法人 日本野鳥の会」来室
	21	第5回学生ボランティアグループ会議
	22	「日野療護園」来室、「日野市環境保全課」来室
	23	「NPOおたすけ個別補習塾」来室
	30	ノートテイク講習会（日野校）参加者10名

10	12	学生ボランティア活動発表会 18:00~19:30 助言者：調布市市民プラザあくろす市民活動支援センター副センター長 小林祐子氏
----	----	--

◆ボランティアセンター登録団体（2009年7月末現在）

学内	11団体	①教育研究部 ②ボランティアサークル「めばえの会」 ③初等教育研究会 どんこの会 ④ボランティアサークル「SMILY」 ⑤I dear 研究会 ⑥朝日キャンプ ⑦ひまわり ⑧へき地教育研究会 ⑨児童文化研究会「人形劇団まめ」 ⑩明星大学ごみ拾いサークル「サンクス！」 ⑪海外支援サークル「あすなるの会」
学外	44団体	①障害児放課後活動クラブオンリーワン（府中市八幡町） ②NPO法人 Filo（多摩市落合） ③NPO法人 Hope Scoop Asia（福生市本町） ④「めばえ」の会（青梅市新町） ⑤コシヒカ リの郷南魚沼市自然体験村実行委員会（新潟県魚沼市六か町） ⑥日の出町ボランティアセン ター（西多摩郡日の出町） ⑦NPO法人日本子守唄協会 東京多摩支部（福生市加美平） ⑧社 会福祉法人武蔵野会 すぎな愛育園（八王子市台町） ⑨ひの市民活動団体連絡会[ひの市民

	<p>活動支援センター] (日野市日野) ⑩日野市立つばさ[自立訓練・就労] (日野市旭が丘)</p> <p>⑪日野市立やまばと[地域活動支援] (日野市旭が丘) ⑫NPO 法人なかよし会 なかよしクラブ (三鷹市牟礼) ⑬あさやけ作業所 (小平市小川) ⑭NPO 法人全国移動サービスネットワーク (世田谷区船橋) ⑮ひの炭やきクラブ (町田市小山町) ⑯水と緑の日野・市民ネットワーク[みみネット] (日野市日野本町) ⑰児童擁護施設れんげ学園 (東大和市芋窪)</p> <p>⑱都立多摩桜ヶ丘学園 島田分教室 (多摩市中沢) ⑲社会福祉法人 東京光の家 (日野市旭が丘) ⑳社会福祉法人 夢ふうせん 工房夢ふうせん(日野市旭が丘) ㉑東京都 日野療護園 (日野市落川) ㉒日野市 環境情報センター (日野市日野本町) ㉓東京 YWCA 国領センター (調布市国領町) ㉔社会福祉法人共働学舎 (町田市小野路町) ㉕日野市国際交流協会 (日野市本町) ㉖NPO 法人 ふみ月の会 (調布市布田) ㉗立川市青春学級 (立川市柴崎町) ㉘あきる野市社会福祉協議会 市民活動推進係 (あきる野市平沢) ㉙VFM 東京 (青梅市) ㉚いきいきふれあいフェスティバル実行委員会 (青梅市今寺) ㉛島田療育センター (多摩市中澤) ㉜あきる野青年会議所 (あきる野市秋川) ㉝日本児童野外活動研究所 (品川区西五反田) ㉞日野・発達障害を考える会「スキッパー」 (日野市多摩平) ㉟特定非営利活動法人 療育ネットワーク川崎 (川崎市多摩区) ㊱CoCoA (豊島区東池袋) ㊲社会福祉法人 ココロ学舎 (西多摩郡瑞穂町) ㊳社会福祉法人 至誠学舎立川 至誠ホーム (立川市錦町) ㊴ボランティアグループこすもす (日野市多摩平) ㊵NPO「おたすけ個別補習塾」 (日野市三沢) ㊶地域デイサービス テイクオフ (立川市高松町) ㊷日野市障害児童クラブ (日野市平山) ㊸野楽 (tama Rock) (府中市是政) ㊹NPO 法人 グループゆう (東大和市中央)</p>
--	---

◆ 明星大学ボランティアセンター運営委員会の構成 (2009年7月末現在)

役 職	氏 名	所 属
センター長	渡戸 一郎	人文学部 人間社会学科 教授
副センター長 (日野校)	吉澤 秀二	理工学部 環境システム学科 教授
〃 (青梅校)	菱山覚一郎	一般教育 (青梅校) 社会科学 准教授
学生部長	小鍛冶徳雄	理工学部 電気電子システム工学科 教授
センター長が必要と認める者	垣内 国光 島田 博祐 黒岩 誠 村山 光子 百木 英明	人文学部 人間社会学科 教授 人文学部 教育学専修 准教授 人文学部 心理学専修 教授 日野校 学生課長 青梅校 事務局次長兼青梅教学課長
事務局長	荒井 徹	
専任職員	宮崎 茂男 畑野 理美 大和田知子	日野校 ボランティアセンター課長兼務 日野校 ボランティアセンター 青梅校 教学課学生担当
オブザーバー	石田健太郎	人文学部 社会福祉実習指導員

